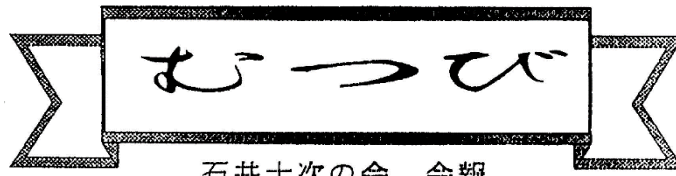


2025 年
(令和 7 年)
6 月 12 日



333 号

所感及び令和 6 年度石井十次の会報告

石井十次の会

会長 橋田 和実

初夏の候、会員ならびに関係各位の皆様にはご清祥のこととお喜び申し上げます。今年の夏も昨年と同様、猛暑がやってくるのではないかと心配されます。

世界情勢は独裁的リーダーといわれるアメリカのトランプ大統領やロシアのプーチン大統領によって、自分さえ、自国さえ良ければいいという国際秩序を失わせるような考えと行動で、世界中が翻弄されています。しかし、そうした行動は全体としてマイナスが大きくなり、長続きはしないと思われます。恐らく、その要因はアメリカ、ロシア、中国にしても自国内の問題が大きいかからではないでしょうか。

我が国も例外ではなく、人口減少、少子高齢化、大規模な自然災害、物価高騰、政局不安定と併せて、全体的な“怠惰”の進行が問題となっています。やはり日本人といえ、コツコツと努力する“勤勉性”が象徴とされます。

石井十次は、国内外ともに世情が不安定な時代にあって、当時の日本の人口は 5000 万人に満たない中、政府の援助もなく民間の支援や寄付を受けながら、自活によって延べ 3,000 人の孤児を救済し、養育しました。誠に偉大な児童福祉事業でありました。大自然のなかで農作業を主軸として、労作による子ども達の忍耐力、勤勉性、協調性そして礼儀正しさを培いながら、その運命を良い方向に導き、立派な社会人となるよう世に送り出しました。

我々現代人も利便性を享受するだけでなく、日本人の原点に立ち返って、勤勉性、集団性、礼儀を重んじ、利他の心を養っていかなければならないと

思います。そうしなければ、日本の復活、良き未来は望めません。

令和6年度の石井十次の会は、ようやくコロナ禍以前に戻り、順調に活動や事業を行うことができました。

支部の結成も都城、西諸、宮崎に次いで西都支部ができました。今後は、高鍋・木城支部ができる予定です。これからは本部を中心に各支部間の交流も盛んになってくると思われます。

会員研修は、ゆうあいの森（明倫保育園、あきづきの家、せいごろう亭）の見学を行いました。さらに石井十次の瑩域清掃、代表役員会、幹事会、総会等の会議、毎月のむつび編集委員会も活発に行われ、給付型奨学金事業では8名の卒園生に給付することができました。また、せいごろう亭の改修事業にも新たに支援しました。これもひとえに会員の皆様のご支援のおかげであります。そして、友愛社の事業であります石井十次セミナー、鯉のぼり掲揚、収穫感謝祭、クリスマス会、卒園お別れ会に参加するとともに、通信発送作業もスムーズに実施することができました。

石井十次の会奨学金を受給されている卒園生の皆さんは大学、短大、専門学校に通った後、立派な社会人となって活躍されています。本年4月から宮崎県の小学校教員に採用された方もおられます。

尚、令和6年度収支決算、奨学金基金、十次の会積立金については6月号むつびと一緒に別紙で報告させていただきました。よろしくお願いいたします。

最後になりましたが、石井十次の会へのご協力とご支援に心より感謝申し上げます。健康で元気に活躍されることをご祈念いたします。

十次を巡るエピソード（その9）

十次の郷土愛—基和子の 弔い合戦—

1. 三女・基和子永眠す

明治44年5月、十次の三女の基和子が17歳で亡くなりました。基和子の名は、基督の基と和魂の和からとりました。母・品子のもとで育てられること7ヶ月、その後は辰子に育てられました。山陽女学校を卒業する頃に結核にかかり、茶臼原に移ってから病勢が進みました。十次は長女・友子とともに基和子を看病していたとき、枕もとで「神の力とは、無欲、正直、親切、熱心なること、がその全能力なり」という話をしました。それを聞いていた基和子が、「私もこれからそんな人間になって、すべてのものを貧しき人々に与えたい」といいました。十次は「基和子、献身の決心をなせり」と日記に書きました。



2. 高鍋製糸会社社長に就任を要請される

基和子の葬儀の日に、高鍋製糸会社（繭から生糸を紡ぐ会社）の株主総会は、十次に「社長となって傾きかけた会社を建て直してほしい」と要請してきました。十次は、それを引受けました。「神がそうせよと言っている。児湯郡全体の農民のために、尽くすことにした」と言っています。「これは基和子の弔い合戦だ」とも言っています。「弔い合戦」とは、戦国時代の言葉で「戦死者の望みをかなえることで、その霊を慰めるためにする合戦」のことです。ここでは「基和子の霊を慰めるための社会貢献」という意味で使いました。児湯郡全体の農民のため、というのはつまり強烈な郷土愛の発現でもあります。

3. 十次の郷土愛による事業の数々

十次は、明治27年に孤児60名を連れて茶臼原に来たとき、日向灘を望んで「帰国途上の所感」という詩を詠んでいます。「ああ美なるかな日向の地、予は実に爾を愛す、アゝ仕なるかな太平洋、予は実に爾を愛す」から始まる155字の詩です。十次の強い郷土愛が溢れた詩です。十次はこのあと様々な事業を興します。

明治29年、高鍋町小丸に日州活版所を作ります。院児に職を覚えさせ、同時に地元に出版文化を広める目的がありました。明治30年に、勤儉貯蓄を推進するため日向銀行を設立します。いま高鍋高校のある場所に孤児院の精米所を作ります。次に製糖業を興し、砂糖製造会社を作ります。

明治30年に岡山から孤児40名を船便で茶臼原に送ろうとして、赤痢が発生し、4名が亡くなるという悲劇に見舞われました。しかし困難にひるむことなく、茶臼原移転を続けます。明治39年に東北大凶作が発生し、十次は無制限に孤児・貧児を受け入れることにし、1,200人体制となります。その翌年に孤児を茶臼原に送ります。41年に十次も茶臼原に移りますが、重い腎臓病にかかり、視力障害が発生して、2ヶ月間を暗室で過ごします。奇跡的に健康が回復するとすぐに、小丸川の洪水を防ぐために小丸川河心改修期成同盟会を設立します。上江村と高鍋村の合併を推進します。このような時期に日本各地では養蚕業が最盛期を迎え、高鍋は宮崎県でも最も養蚕の盛んな土地になりました。茶臼原孤児院も養蚕業に参入し、孤児院の養蚕業は軌道に乗ります。

4. 十次、製糸会社の社長として経営能力を発揮する

養蚕業のなかで、蚕の繭から生糸を紡ぐ作業を機械化した高鍋製糸会社が設立されたのは明治17年のことです。養蚕農家から広く繭を集めて、機械で生糸を生産する会社で、養蚕農家の期待を担った会社です。この会社は、十次の父・万吉、義兄・岩村真鉄、支援者・黒水長平等も参加して設立しました。一時は児湯郡一円の養蚕農家に非常な利益をもたらしました。しかしその一方で、会社の重役のなかに不正行為をする者がいて、社会から非難攻撃を受けます。会社の経営状態は次第に悪くなります。こんな会社の建て直しが十次に期待されたのです。

十次は経営改革を断行します。まず女工の待遇を改善し、寄宿舎のすし詰めを解消。昼食は弁当配付を止めて立食満腹主義をとる。固定賃金を止めて、生産能力に応じて賃金を支払う能力主義をとる。無学な女工には夜学を開いて教養を身につけさせる。こうして、まず社員のモチベーションを高めた上で、営業を強化します。

十次は、キリスト教の先輩で京都府で郡是製糸会社（現社名・グンゼ株式会社）を経営する波多野鶴吉翁を訪ね、経営方法の指導を受けました。製品は仲買を通さず直接市場に出して、中間搾取をなくすこと、口約束でなく契約書を取り交わすこと、品質管理を徹底して品質の良い製品だけを販売して市場の信頼を得ること、等を徹底していきます。こうした経営で、次第に会社は改善され収益が増えてゆき、社員にボーナスを支給できるところまで回復しました。しかし、社長の十次は無報酬を貰きました。これが十次の社会貢献でした。まさに、「基和子の弔い合戦」を実行したのでした。社長を引き受けて2年後の大正2年5月、十次は体調不良のなかで高鍋製糸会社の総会に社長として出席。しかしその後病勢は進み、10月には病床を離れることができなくなります。年が明けた1月30日、十次はついに帰らぬ人となりました。基和子の弔い合戦のなかで、十次の生命も燃え尽きたのです。（編集委員・石川正樹）



絵に色鉛筆で色をぬる様子

毎月会員の皆様に届ける「ゆうあい通信」と「むつび」を送るために、第二水曜と木曜日は、方舟館で作業をします。①1700部のゆうあい通信の絵に色を塗る。②丁合ひして折りたたむ。③事務局で準備された封筒に入れる。このような作業です。海外在住の方にも発送します。

作業をしながら様々な会話が飛び交います。「親や配偶者の介護のこと」が共通の話題ですが、石井記念友愛社に勤

務された方々からは「方舟館が理事長室だったころの思い出」を聞くこともあります。作業をしながら繰り広げられる会話を聞いて大笑いすることもあり楽しい時間です。都合のつく方は、一緒に作業をしてみませんか？

(編集委員 西村さと子)



方舟館からの お知らせ

明治末期、岡山から移築され、石井記念友愛社の敷地内に立つ方舟館。
現在は石井十次資料館の案内窓口、また、石井十次の会事務局として使われています。

★新会員のご紹介(敬称略)

【木城町】永田 敬子【西都市】岡藺 好子【東京都】平沼 久人 平沼 和代 平沼 えり 新田 民子

★ご寄付をいただきました(敬称略)

【宮崎市】辰元 圭子 山崎 正彦・美智枝 河野 直佐 松尾フジ子 永尾 真一 村田 順子 谷口 眞由美 酒匂 千昭 岩見 智子 荒武真奈美 黒木 国昭 島田 浩二 景山 武純 皆内 康広 黒水 斐子 越智 公美子【都城市】豊丸 昭子 山下 和子 本郷 貞雄 前田 重治 小玉 忠宏【西都市】鬼塚 長幸 黒木 三鶴 黒木 良直【高原町】西村 四男 伊達 寛之【高鍋町】(株)あおい会館 池田サワ子 木下浩利・ほなみ 永田 剛正 財津 信子 財津 壽美子 蟻塚クリニック 萱嶋 稔【新富町】甲斐工務店【木城町】後藤 和実 長友 英親【川南町】吉村 幸代【日向市】富山 栄子【東京都】柳田せい子 小林 敦子 山岡 雪子【神奈川県】篠原 勝 松岡 宏 加行 尚 浦 初恵【岡山県】佐藤 晃一【茨城県】森 邦彦【福岡県】渡邊 福 松岡 智・則子【千葉県】金平 万吉

*ここまでの掲載者は編集等の都合により5月20日までのものとしています。

この会報は、宮崎県を中心に全国 1700 余の個人・団体に毎月送付しています。

〒884-0102 宮崎県児湯郡木城町大字椎木 644-1
社会福祉法人 石井記念友愛社後援会
石井十次の会
TEL/FAX 0983-32-4612
メール yuuaisya-jyuujinokai@ki.jo.jp

編集後記

石井十次の会会長 橋田和実様に玉稿を頂きありがとうございました。

会長として、十次の会事業や各支部の行事、毎月の発送作業に参加されるなど多忙な中に執筆いただいたことに感謝申し上げます。

(編集委員 西村さと子)